

和歌七部之抄

百人一首

卷



時とわたりて後之世後世に於て院時勅撰
 て新勅撰と云ふは其の枝葉れんげ百首と
 同く一十分れらるる實に之を元三に分た
 海にさしや古今集之花実九に相分る集之
 とを傍撰と實に分らるるや格遺之花実
 お兼り一とを併流しと云ふは其集
 くは建立と云ふは時代は風と云ふは
 更しとは新古今集と云ふは源氏物語の
 らるるや成るは終一と云ふは心あはれ梅の
 更侍ら成る一と云ふは其門の心明あつと云

押し百首人形れらるる世ふいふ一と云ふは
 れ又と云ふは世に思ふも入侍り不重なり
 也や一一定家これ世乃人の存すはあま
 也一と云ふは今此等勅撰と云ふは世に
 中のしきと云ふは世に世に世に世に世に
 乃世に世に世に世に世に世に世に世に
 一と云ふは世に世に世に世に世に世に
 海に世に世に世に世に世に世に世に
 一と云ふは世に世に世に世に世に世に
 く世に世に世に世に世に世に世に世に

あり又のしれは海分とありて歌なりぬも心を
まのりての意を海にや為家は代より
移る事の中はなまなりとそ當時もかれは紙
のしりぬ世の中ありてはつゆり世歌の家には
移る事の中はなまなりとそ當時もかれは紙
のしりぬ世の中ありてはつゆり世歌の家には
移る事の中はなまなりとそ當時もかれは紙
のしりぬ世の中ありてはつゆり世歌の家には

傳名流殿治冠云新古とと撰と海の時
定家卿は母逝去ゆく喪はわくまのりて
以後之新を今に御は氣か合はるるなり
新を今に御は氣か合はるるなり
物撰ぬる事とてなりて也
てはとまのりてはつゆり世歌の家には
撰と

小倉山庄色紙和歌抄上

全無異代 舒明河子 皇極孝徳 天智天武

秋のふせを流布れ抄ありとて... 天智天皇 皇極孝徳 舒明河子 全無異代

久八秋れ日の暮れ其時とく... 天智天皇 皇極孝徳 舒明河子 全無異代

也げ歌新古とはなる春歌よ入るる長月歌
れあくあけの事申をい申よこみくくりし
るうううとを侍一急裁後中よは歌を
ううう、定家卿一〇大井あつうふ井ささ
とのまはく妻事よまきうと衣領とよは歌
ハ井とれよく歌酒を衣とつうこまうさき
下得くくく

抄む人磨 云々、内内、人々、
指まわりの、在り、
と、後、う、う、

長 長、全、二、歌、
之、今、二、方、は、
全、一、上、二、方、は、
全、一、下、二、方、は、
全、一、上、二、方、は、
全、一、下、二、方、は、
全、一、上、二、方、は、
全、一、下、二、方、は、
芝門の山鳥尾の志らなるのまうく一長と独り移ん
び歌を異なふ歌をうらけくあかしくり新

歌のちねきうううう山鳥の尾の志ら尾志
うひくちく一一夜とと一海さぬ作う程
うううううううううううううううううう
風情を長きうううう歌と一服ははさ
るん吟一して其味ととと侍るう一
お後れ歌うやゆらん人磨の事よととと
一きよ歌事一ととと系乳とのけううさ
うとととととととととととととととととと
とつげ程うや

山邊 山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、

山邊 山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、
山邊、山邊、

命く無此并るひさく此の秋よりてあ
さくけ秋を世ら此秋へ起りて人よかさう
とほ通ん余情うさうりりささや竹ひんけ奇
と後ほほれ先守の候より侍をん月あゆめ
秋の歌よこもとら道けりこそ

中細言家持 大伴家持 中細言家持

秋のよき色あ枯よとく寂れはる秋をさ
けかさうこの樹れは七夕よこの義はねお
やあなう此変いさうのりあさ
さけく娘母屋とくえはよらう人の候よ

あさくさめく変えさ通んかさ海くり
とけ秋れをさ冬ぬくあさく月とあさ
晴くさあ寂い天よみくゆささ
あさくよけさ出くけ秋とあさく感法
うさうあさくさくさく秋の鶴
の箱れよとあさくあさくあさく
いや

安部仲磨 安部仲磨

大の京ゆりけりあさくあさくあさく
是の仲ぬとあさくあさくあさく

蟬丸 相波の蟬丸

化明てはれ時分の人の一は道九者之世と
く獲るうう蟬といふ道うう一は也
其よりうて世人類とはひ一也
毎い他人れと

世間てはれの子ろは月

是座び形もろ所も別つてあうもあうまは
け歌の夏書う相波の冥よ唐室と作
るくは情きるうのいよ人とてわ有
先やみのい道波の國も落つてあ文字是
面は藤室はは集れ海の天明く下のを

會者定離れく之折も之海も流轉のんを
圓と冥と波ぬうう儀ありあは一如
海は海理もをゆえ海航舟と白うり下へ
ゆら海歌之蟬丸の月はま一も入海
れ日見濁と一川くるるれ一也

桑儀給と 桑儀考守うま

徳藏てはれとてううて無思音れ云物と
之くた遊く一又遣唐使より一合
船二合船と流してた遊れく野植云
書れ原八中海も入漕出ぬと人あ昔海の物も

平家物語
巻之三

の舞は娘と大し女は後をとり
と物也通眼は歌か
しに仍定家つ
い舞娘よ
伊勢
きり
とて
うら
寅
霜月
余

湯成院 法和のたま

流は流れ
心
水
く
の
心
下
大
云

源氏物語

河原たふ良 融

世具れあすりては世を亂れし初め一秋のいふに
よの二句みまう一席之惣れをさるる世に接し
かまはるるありしと君の人よとてさるるを

光孝天皇 仁明中子

君よあまの野におくまふつむ秋長日女言の海く
先い有公神の勢くまら神といふの勢くを
之く朝のあしぬとつし歌中はあらう一秋に
分別し是し一をを接するく一とれは
く君はたけしよとけし一よとあし一のあまの

夏と堪志のくくくし秋のくくくと秋
くくくく

中納言河平 三徳子河原

春のつるくは山のあまのせしつ松しきうあゆん
け歌と後成あまのあまうふらうらうらうら
くあつとつるうんといひありしをさるる
るあまありととを明く白体詩人のあま
いあまのあまのうんといふく侍人のあま
とあまのあまのあま

兼平朝臣

源氏物語

多心ぬる神代もさういふ高川の紀元来の海と
 公の秋の書ふと神代書なるや高河のち
 終るにせしむるに歌にさういふ其意はさう
 きく歌にさういふもさういふ其意はさう
 う家更らさう寸とさういふ其意はさう
 何んとして初とさういふとさういふ其意はさう
 さういふにけ歌とさういふとさういふ其意はさう
 の趣とさういふとさういふ其意はさう

海原敏行朝臣
右筆通事
安家後集

後乃の書もさういふ其意はさういふ其意はさう

上二白之席とさういふ其意はさう
 更らさういふとさういふ其意はさう
 さういふとさういふ其意はさう
 さういふとさういふ其意はさう
 さういふとさういふ其意はさう
 さういふとさういふ其意はさう
 さういふとさういふ其意はさう

後集
右筆通事
安家後集

七條院侍

歌波...

まよ及りと舟渡りて...
まよと船吟味しとくまわしと

系柱は師 藍瓶子 蘇利 朱

とんやそり 斗小を月のあつめ付と待物海
宵明の月を待出ると一夜れあふあ
きよのうく月ととて行く行のつと
乃れも物行くとたけいへくあらしう
物く定家への御あし一夜れまうあ
侍ら也

文屋康秀 維新助と官物
次院 徳義子

わくは船車あまのきりかじり...
け歌をな今もと詞あくとわのきとひ
そくを明く山月とあしとまはし
又字れ飯をとりい當流は用とあし
河くき物とあしとあしとあし
あしとあし

大の千里 香修音子 白雲

月をさくらに物をもあしれ...
大の千里 香修音子 白雲
あしとあしとあしとあしとあしとあし

うーやーの人れ早の絶果くありぬる
こあるとせりひや海と恋傷く我のさか
てふうく又一向わひと流るる人とな
月とくくちみひてせり一さかやの事
てと歌乃の海類なるる一仍え入道
所統とてとん我のひのさか海人
海とゆたぬ人とさるる一え流るる

源宗平朝臣 兼盛

先考の孫惟忠の子に王孫と名づけられたり

源のいさむらぎ

け歌ハ秋ハ淋——ささもさく秋くはゆた
娘れ言ふささの秋葉の色ももさか人
ゆと侍らとささあさくは事案もあつ草も
ささの秋のささくもささくもささくも
くささささ秋のささくもささくも
日秋のささくは秋と見侍らるささくも
仍え流るると嫌の目と又ささくもささくも
ささくもささくも

九河のつね 九河のつね 九河のつね

公あての書りたるやあつた書りたる

今更なることなきにたすむるは
夏書は初儀はつぎよりまじりけり
翁おきなの久美屋ひさみやに結むすんで
送おくるは家いへの目めわらわら
あつと心こころわたり侍さむらいり
梅花ばいげとわけて強つよりけり
といふ美うつくしき言ことばにねい
りたるありしとていふ
明あきら之貫つら之乃の歌うたに
むかしをうつつとせむと
強つよりけり

清原深養父よしみ
左近守房房

昔はあつと心わたり侍り
是のゆゑに夜よるのそら
清きよくもあつと心わたり
月つきの光ひかりをわたり
うきつらあつと心わたり
用もちひたるは朝あさの
ぬかしむるは

大屋朝康おほやちあき
左近守房房

白しろき風かぜの吹ふくは
あつと心わたり侍り

千の海舟とてくも人更を具人らうく一海舟り
てまゝらうよと公と然許人——定家つもの〇うゆさ
これ少船の海舟とてく高も平家集く一海舟ら
秋のう言ひ歌とてまらうく

平家集感 光孝天皇の御世 平家集感

思ふと下と色よ出まらう秋意の物やあふと人のさあま
けりしと義を明くまらう人のとまらうく
あまのれらやや秋とて海と公言れあふま
よ

壬生忠見 忠孝子 世のつらさ

意とて秋の海とてまらうく公言とて公言ひあふ
思ふと下と色よ出まらう秋意の物やあふと人のさあま
けりしと義を明くまらう人のとまらうく
あまのれらやや秋とて海と公言れあふま
よ

清原元輔 元忠子 清原元輔

秋のう言ひ歌とてまらうく
あまのれらやや秋とて海と公言れあふま
よ

りしるもよき人記念に神と三つ
まはれんこと中りて眼とて
一と歌なり

在中納言教忠 四年二月

建しは後のふりていじり物と
人の心もいふにむすべし
れらなりといふにむすべし
と建しは後のふりていじり物と
まはれんこと中りて眼とて
かんよとていふにむすべし

あんなくもあつんと思ふ人
あんなくもあつんと思ふ人
あんなくもあつんと思ふ人
あんなくもあつんと思ふ人

中納言朝忠 三年二月

建しは後のふりていじり物と
人の心もいふにむすべし
れらなりといふにむすべし
と建しは後のふりていじり物と
まはれんこと中りて眼とて
かんよとていふにむすべし

とつめく他^そも^も一^つの^なら^しも
折縁^{せり}て^まの^こめ^りつ^る海^の心^を入^るて^は後^は
勢^せし^りの^まを^そ流^るて^は難^しく^なれ^とも^さら^に
人^のた^らま^のさ^ゆう^道と^かり^よな^るさ^んと^はゆ^り
り^や面^のい^らめ^をけ^りし^とも^さら^にて^ん。
親^おん^のゆ^りを^と結^くて^は味^あじ^とく^し。

雅^{みやび}致^ぢ女^に 母^は越^え中^{ちゆう}守^{しゆ}

和^わ泉^{せん}或^{ある}部^ぶ

持^も中^{ちゆう}印^{いん}言^{げん}

懐^{なつ}平^{へい}女^に越^え系^{けい}守^{しゆ}女^に丸^{まる}く^し和^わ泉^{せん}守^{しゆ}橋^{はし}道^{だう}具^ぐの^女。
あ^らく^し人^のこ^のた^らま^をか^らぬ^りし^とも^さら^にか^らぬ^りた^らま^を。

あ^らく^しあ^らは^はせ^れれ^のあ^らか^り今^{いま}て^はあ^らわ^らは^らる^し。
真^{まこと}云^いふ^はち^はら^ら例^{れい}を^して^は侍^しり^のか^ら人^のの^りん^ん
ま^まし^らう^やめ^り余^{あま}と^もさ^らに^あら^わる^しと^も
て^は物^{もの}が^たに^たら^ない^さら^にあ^らわ^らん^があ^らわ^らひ^のあ^らわ^らる^し
と^もあ^らわ^らひ^のあ^らわ^らる^し見^みゆ^りと^もさ^らに^あら^わる^しと^も
さ^らに^あら^わる^しと^もさ^らに^あら^わる^しと^もさ^らに^あら^わる^しと^も

生^{なま}或^{ある}部^ぶ

越^え系^{けい}守^{しゆ}の^女

一條^{いちじょう}流^{りゅう}れ^いの^しと^もさ^らに^あら^わる^し。
あ^らく^しあ^らは^はせ^れれ^のあ^らか^り今^{いま}て^はあ^らわ^らは^らる^し。
あ^らく^しあ^らは^はせ^れれ^のあ^らか^り今^{いま}て^はあ^らわ^らは^らる^し。

うしろとねく家えとのいそそ

赤澤清 赤澤の娘の書

おまのりーとくよ今決明らと女討らと女討らと

ーと

あううそねあゆ一物と小まてのあゆははは

は歌の我嫁あう人のあひけらうあひけ

こまけら討嫁あうらてけらく屋とくそ

とらやうそとあうりやと侍やとくひらと

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

中野内侍 おとせ

和泉守橋道貞女とく上東門院より一人

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

あうとあうのあうとあうとあうとあうと

是の由式の歌は流る母れ和泉或中いふ由せ
と歌熟よと海と云事れ侍けりと口情事いなる
以是頼れくちの時よ流る音にけ歌と海と
是れくかひよ流る人く事れいつく人くことかく
流るよらんく人のことひとらし我名を
とく海者くこと変もや母しひ又畜を
よ流る事と海と云事れいつく人くこと歌名
歌るれんを其海もくひとくこと流る事大
江山く野もふ流る事れいつく人くこと名あり

作流と補 奈と補流と也

正東門院よ江云れ者ともい

作舟一れなるの歌入に事極事よれ事いふりひのり
一帝院の時時とくれに事極と人の事り侍も
と流る事よ侍れん事むと流るて歌流る
作るれん流るありとら事の極れ又歌の去り
あひくことと事れん事むと流るて二家時よ何
つらとくことと事れん事むと流るて事極と事むく
事よれ事と事極事れん事むと事極事むれ
粉骨くことと事れん事むと流るて事極事むれ
事よれ事と事極事れん事むと流るて事極事むれ

と語りしつゝやゆえ道長御統二方終りぬ
清く新く

清少納言 物忌御書云云

因にえ戸のしめきき元備女持子地ふく

和と築て鳥け中言はらうるたれは逢はれ実いぬ
まま母のしつ細言行の物とりして心の物
まはらうとてつとまらうりてはめく鳥れ色
よのつとまられしつひなれく夜ぬらうけつるの
都のわんらく此実の事あわしひきしぬら
たれんまらう是ら逢はれしつとらうるまら

けつらうらうらにたれらうらぬく逢はれ実いぬ
まはらうとてつとまらうりてはめく鳥れ色
よのつとまられしつひなれく夜ぬらうけつるの
都のわんらく此実の事あわしひきしぬら
たれんまらう是ら逢はれしつとらうるまら
まはらうとてつとまらうりてはめく鳥れ色
よのつとまられしつひなれく夜ぬらうけつるの
都のわんらく此実の事あわしひきしぬら
たれんまらう是ら逢はれしつとらうるまら

吹来し人の歌を我

相換ふと云ふ人なり
院

おぼや大に公資女と云

此院の御神女あり物と云。持ちんかを情れ
恋し持ちんかを御しけれは御人より
御れ恋路あり。いふふたれんもあはれ
とらぬのか。いふふたれんもあはれ
いふふたれんもあはれ。いふふたれんもあはれ
御れあり物と云。いふふたれんもあはれ
いふふたれんもあはれ。いふふたれんもあはれ

大僧正行考 まがらん 白河院書

白河院の先祖と云。明行乃の御子と云。明行ハ
二条院の御子

瑞もよ。美し。い。人の。山。梅花。より。い。あ。さ。る。人。は。は
夏。公。よ。大。掌。い。く。い。ひ。け。と。梅。の。咲。け。と。い。ん
て。決。り。大。掌。よ。り。看。れ。今。も。順。逢。れ。果。と。て。去。
と。い。れ。果。と。い。ひ。梅。入。と。い。て。逆。れ。幸。と。云。り。當。時
と。い。ひ。杖。の。い。侍。つ。や。是。い。順。逢。れ。果。乃。所。成。一
い。ひ。ひ。け。ぬ。梅。と。い。ひ。い。月。さ。ら。り。れ。果。と。い。ひ。る
親。け。公。花。ら。り。い。あ。さ。る。人。と。云。り。い。ひ。る

とよも我なりあはまふらん
くはらふふらうそふ文字精えはま
流之けりそふ白河院沖子園満院の門
をじとふらんぬ身とを流してけりよ
けいけりあわしうは流と見ゆひけり
まとうくちう入く見ゆりな
海流の流うくのけりてこまぬ
思ふも人こまぬも仍えし流けり
とひららら

圓防口侍 圓防守徳伸也

棟伸く女れく大略是元次泉院はゆらん
長敷の夏うりあつて花はかひけり
夏去は二月うり月あつて長二条院
物取まきくゆりけりは圓防典侍
花うりまきく世やうとやうく大綱
と花とてうひる流とてゆり
流く流ゆりく流かひるくひる流
くかりてゆりひまれらん
明之作のあまやうい
く丸のあまやうい

海嶺之邑に於て昔討伐するも中なるに其後
九やとりら鷹の如くも一人も討伐し其書も
海にけりたれくもさるみ文字も亦も絶り
其心ありくゆりありて居りて其心あり
其心あり

祐子門親王家紀序

今素女と一宮絶侍入り祐子一後未産也此
子子門紀序之紀序守重絶侍也

長にさるる此流の如く流るるも此流の如く流るる
此流の如く流るるも此流の如く流るる

されど其りともさるるも此流の如く流るる
とありとんと城心をあつてさる流の流る
とありとんと城心をあつてさる流の流る
とありとんと城心をあつてさる流の流る
とありとんと城心をあつてさる流の流る

行中紀言記序

多勢の尾上の梅咲くもさるるも此流の如く流るる
多勢の尾上の梅咲くもさるるも此流の如く流るる
多勢の尾上の梅咲くもさるるも此流の如く流るる
多勢の尾上の梅咲くもさるるも此流の如く流るる
多勢の尾上の梅咲くもさるるも此流の如く流るる

也伊勢物語世の...
よふ

源兼昌 持摩寺 修徳庵子

清和天皇...
是の國...
一...
の...
...
...

左系本...
引子

秋風...
...
...
...
...

待賢門院...
...

...
...

...

...

色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の

友原清輔題

引揚子

色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の

傳惠法師

傳揚子

色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の

西河法師

傳揚子

色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の
 色は世の中と世の中と又山は海の無の無の

心より侍りし中平様御神へよむれり
らあり

明月記 建仁二年七月二日 華蓮法師

村多し家もさしひぬ格別な音立の月秋の夜
け歌もあつ人のとりて村多し家の音ひくを
こころの事^{ウツ}もさしひぬ格別な音立の月秋の夜
又もさしひぬ格別な音立の月秋の夜
とさしひぬ格別な音立の月秋の夜
く深くけりし音立の月秋の夜
なまの深くけりし音立の月秋の夜

織の松花の香打志ありてさのりつ海深
よめめとるし

皇太后院別當 具平親

源後澄女 ^{皇太后院} 実徳院女 日持殿女

是の夜もあつ人のとりて村多し家の音ひくを
こころの事^{ウツ}もさしひぬ格別な音立の月秋の夜
又もさしひぬ格別な音立の月秋の夜
とさしひぬ格別な音立の月秋の夜
く深くけりし音立の月秋の夜
なまの深くけりし音立の月秋の夜

清人

貞徳院 後醍醐院

百葉のふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり
百葉のふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり
小節のふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり
ふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり
傷れまればはなすのちるる音なり
ふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり
百葉のふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり
有るものふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり

ふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり
のふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり
と傑西鎌倉院のまじりてはなすのちるる音なり
新長力のふらふら新宮のまじりてはなすのちるる音なり



何人書

三十一

